

# 「可怪<sup>おか</sup>しい」「可<sup>か</sup>ー」型形容詞について

増井典夫

## 一、はじめに

「おかしい」という言葉が「可怪<sup>おか</sup>しい」と表記されているものがある。現代の作家、小野不由美の作品に見られるものである。

この、小野不由美の作品に『十二国記』と呼ばれる作品群がある。シリーズ一作目『魔性の子』（一九九一年）に始まり、『白銀の墟<sup>しろぎん</sup> 玄<sup>くろ</sup>の月』（二〇一九）まで書き継がれている。

この作品群は、「異世界」ファンタジー小説であるが、中国風の言葉が多く使われているようにも思え、中国大陸をイメージさせるところもあるように思われる、そんな作品群である。

ところで、この作品群について、現在の出版元である新潮社（かつては講談社文庫などでも刊行されていた）の公式サイトを見ると、

「十二国記」とは、我々の棲む世界とは異なる地図上にはない世界（十二国）をつなぐ物語。

などである。この「十二国」には、

柳北国、雁州国、慶東国、巧州国、奏南国、才州国、範西国、恭州国、  
戴極国、舜極国、漣極国、芳極国、

という、漢字表記の、どこか古代中国を想起させるかのような国名が付けられている。そのような、「中国風異世界ファンタジー」とも称される作品である。しかし、オリジナリティーあふれる作品群である。

## 11、「可怪」

さてこの小野不由美の『十二国記』の作品中にここで問題とする「可怪」という表記が見られる。「可」という形を取る、形容詞の表記の一例である。

○「戴で政変が起こったとき、可怪しいとは思わなかったんですか。」（『黄昏の岸 暁の天』二四一頁、二〇〇一年、講談社文庫）

○阿選が登極した経過はいかにも可怪しかった。（『白銀の墟 玄の月』（一）六五頁、二〇一九年、新潮文庫）

一般的には「おかしい」だと漢字表記としては「可笑（しい）」しかないと思われるが、あえて「不審だ」という思いに

合う表記として「怪」の字を用い、「可怪(しい)」としたのではないかとと思われる。

なお、「可笑しい」については『日本国語大辞典』に、

高山寺本名義抄「可笑 ヲカシ アナヲカシ」

の例が挙げられており、古くから使用されていたと思われるものである。しかし、「おかしい」を「可怪しい」と表記した例は、他には見られないもののように思われる(注)。

### 三、「おかしい」の意味について

さて、「おかしい」という語をを日本国語大辞典第二版で見ると、

①普通と違って、笑うべきさまである。

②普通と違って格別な趣があるさま。賞すべきさまである。魅力のあるさまである。

とあり、その次に、

③普通の状態でないものに対して、いぶかしさや奇異を感じるさま。いぶかしい。怪しげである。変だ。妙だ。

とある。ここでは㊦の意味が当てはまるであろう。

なお、小野は、『十二国記』以外の作品では、

○蛩にしてもどうにもおかしい。（『東京異聞』八頁、一九九四年、新潮社）

のように、「おかしい」をかな書きにしている。

#### 四、尾崎紅葉作品に見る「可ー」型形容詞

さて、「可怪おかしい」は尾崎紅葉作品で多く見られる「可ー」型の形容詞の一つと言える。

尾崎紅葉の『金色夜叉』（明治三〇～三五・一八九七～一九〇二年）では、「おそろしい」を「可恐い」、「すばらしい」を「可感い」といった表記が見られる（『金色夜叉』では日本近代文学館の複製本本文を使用しているが、本稿では『金色夜叉』初版本と称する。なお、これ以降、漢字は新字体で示している）。

「あら、まあ金剛石ダイヤモンド??？」

「可感すばらしい金剛石。」

「可恐おそろしい光るのね、金剛石。」

（『金色夜叉』、初版本前編一八、一九頁）

こういった「可」型の形容詞につながる語形を『大漢和辞典』で見ると、「可疑」「可恨」「可憎」「可惱」などといった表現が立項されている。「可感」や「可恐」等も、中国語の影響と見て良いものだろうか。ただ「可惱」は『大漢和』では「腹立たしい」であって「悩ましい」ではないが。

他、例えば『江戸明治唐話用例辞典』（笠間書院、二〇〇八年）には「可口」「可是」「可笑」の三項目が立項されている。さて、尾崎紅葉の表記の特徴は、「可哀」「可憐」の読みの他、これら以外の表記例に多く見られるように思われる。まず、「可哀」「可憐」を含む、複数の読みの例があるものを次に挙げる。

可哀（あはれ、かあい）可憐（いとし、しをらし、あはれ。初期作品である『伽羅枕』では「かはゆし」）  
可傷（いたはし、いたまし）可忌（いまはし、うとまし）加愁（うれはし。『伽羅枕』では「つらし」）可恐（おそろしい、こはい、こはらしい）可羞（はぢがまし、はづかし）

これらの例は紅葉の特徴が見られるものであろう。一方で、紅葉の試行錯誤が見られるもののようにも思われる。

## 五、『伽羅枕』にみられる「可怪」

ところで、紅葉の初期作品である『伽羅枕』（明治二三・一八九〇年）には、

○今急に持病の胸痛と紛らせば、しほらしくも妙薬なりとて可怪あやしげなる丸薬をわざわざ持ち来たり、（『紅葉全集第二巻』、

岩波書店、一〇八頁）

という例が見られる。

「可怪(しい)」を「おかしい」と「あやしい(あやしげ)」と、紅葉と小野不由美とは違う読みの語として用いているわけである。

ここで見られる「あやしい」という語を日本国語大辞典第二版で見ると、

正体のはつきりわからない物事、普通でない物事に対して持つ奇異な感じをいう。

とある。

「おかしい」と「あやしい」、意味用法が近いものではあるが、「可怪」が違う形容詞として使われているのは興味深く思われる。

## 六、紅葉作品の「可」使用の形容詞の語構成、及び「可怪しい」

ここで紅葉作品の「可」型形容詞の語構成を考えてみる。具体的には、これらの「可」型形容詞から「可」を取り去った時に形容詞として成立するかどうかである。

考察の対象とした作品は、紅葉の二大傑作『金色夜叉』『多情多恨』の他、初期作品の『伽羅枕』、『わかれ蚊帳』(明治二二)である。これらの作品から「可」型形容詞のものを拾い上げ、表とした。表中では『金色夜叉』は(金)、『多情多恨』は(多)、『伽羅枕』は(伽)、『わかれ蚊帳』は(わ)としている。『多情多恨』では日本近代文学館所蔵の、明治三〇年に春陽堂から刊行された本文(初版第三刷のもの)を使用、『わかれ蚊帳』では初出の雑誌『江戸紫』の本文を使用

した。

次の表の上段に、拾い上げた「可」型形容詞、下段に「可」を取り去った形ものを挙げる。その上で、下段のものが同じ読みでの形容詞として成り立つかを考えてみる。

成立していると思われるものに「○」を付けた。A T O Kで変換キーを押すと出てくるもの（ただし「忌まわしい」等の場合は「忌まわしい」の語形が出てくる）である。一方、A T O Kの変換キーでは出てこなかったが、認めても良いのではないか（ただしルビが必要か）と判断したものに「△」を付けた。成立しないと思われるものには「×」を付けて表した。

ア行 (二〇種)		(〇 一〇 △ 七 × 三)	
可怪	あやしい (伽)	○	怪しい
可傷	いたはしい (金)	△	傷はしい
可痛	いたはしい (金)	△	痛はしい
可傷	いたましい (金)	△	傷ましい
可憐	いとしい (多) (金)	×	憐しい
可怜	いとしい (金)	△	怜しい
可訝	いぶかしい (金)	○	訝しい
可忌	いまはしい (多) (金)	○	忌まはしい (忌まわしい)
可憂	うい (伽)	○	憂い
可疑	うたがはしい (多) (金)	○	疑はしい (疑わしい)
可疎	うとましい (多) (金)	○	疎ましい
可忌	うとましい (金)	△	忌ましい
可恨	うらめしい (多) (金)	○	恨めしい
可怨	うらめしい (多)	○	怨めしい

可羨 うらやましい(多)(金)  
可喜 うれしい(わ)  
可愁 うれはしい(金)  
可重 えらい(多)  
可恐 おそろしい(多)(金)  
可懼 おそろしい(金)

カ行 (八種)

可哀 かあい(わ)  
可耀 かがやかしい(金)  
可悲 かなしい(わ)(金)  
可愛 かはいい(多)(金)  
可憐 かはゆい(伽)  
可好 このましい(金)  
可恐 こはい・こはらしい(多)  
可怖 こはい・こはらしい(伽)

サ行 (三種)

可憐 しをらしい(多)(金)  
可感 すばらしい(金)  
空可恐 そらおそろしい(多)(金)

タ行 (三種)

可頼 たのもしい(金)

○羨ましい  
×喜しい  
△愁はしい  
×重い  
○恐ろしい  
△懼ろしい

○五 ×三

×哀しい  
○輝かしい  
○悲しい  
×愛しい  
×憐ゆい  
○好ましい  
○恐い・恐ろしい  
○怖い・怖ろしい

○一 ×二

×憐らしい  
×感らしい  
○空恐ろしい

○二 ×一

○頼もしい



可慎 つつましい(金)  
可愁 つらい(わ)(伽)

ナ行 (五種)

可慨 なげかはしい(多)  
可懷 なつかしい(多)(金)  
可惱 なやましい(金)  
可艱 なやましい(金)  
可憎 にくい(金)

ハ行 (七種)

可差 はちがましい(金)  
可羞 はづかしい(金)  
可愧 はづかしい(金)  
可恥 はづかしい(金)  
可耻 はづかしい(金)  
可慚 はづかしい(金)  
可慙 はづかしい(多)

マ行 (四種)

可難 むつかしい(金)  
可睦 むつまじい(多)  
可悶 もどかしい(多)  
物可恐 ものおそろしい(金)

○ 慎ましい  
× 愁い

○ 三 △ 二

△ 慨かはしい  
○ 懷かしい  
○ 悩ましい  
△ 艱ましい  
○ 憎い

○ 二 △ 五

○ 羞ちがましい(羞じがましい)  
△ 羞かしい  
△ 愧かしい  
○ 恥づかしい(恥ずかしい)  
△ 耻かしい  
△ 慚かしい  
△ 慙かしい

○ 三 △ 一

○ 難しい  
○ 睦まじい  
△ 悶かしい  
○ 物恐ろしい

ヤ行	(二種)	(○ 一 × 一)
可	よい・いい(多)(金) ええ(金)	×
可喜	よろこばしい(多)	○ 喜ばしい
ワ行	(三種)	(○ 一 × 一)
可煩	わづらはしい(金)	○ 煩はしい(煩わしい)
不可	わるい(多)	× 不
可笑	をかしい(わ)(伽)(多)(金)	× 笑しい

これら「可」型形容詞は全部で五五種見られた。

なお、「可怪(しい)」の例は、先に挙げた『伽羅枕』の「あやしい(あやしげ)」の例が見られたのみである。さて、○のもの、△のもの、×のもの、の数の割合を次に示す。

○	二八種	五五種中	五一パーセント
△	一五種	同	二七パーセント
×	一二種	同	二二パーセント

このような割合となる。

さて、本稿で問題としてきた「可怪（しい）」であるが、紅葉の『伽羅枕』では「可」を取ると「あやしい（怪しい）」となり、「○」となる。

一方、小野の『十二国記』に見られる「可怪しい（おかしい）」であるが、「可」を取った「怪しい」は「おかしい」とは読めないので「×」のタイプということになるであろう。

しかし、見方によっては、比較少数である「×」のタイプのものの方がオリジナリティーがある表記だとも言えるであろう。「可怪<sup>お</sup>しい」の一語は、オリジナリティーあふれる表記語だと私は考える。

## 七、おわりに

和語に漢字を宛てる、そのような表記の重要性については、「可<sup>ー</sup>」型形容詞に限らず、今後も検討考察していきたいと考える。

紅葉以外の近代の作家の表記や、小野不由美以外の現代の作家の表記についても考察検討を続けていきたいと考えている。

なお、本稿は、拙稿「尾崎紅葉における形容語での「可」の用字について——金色夜叉」『多情多恨』の場合——『愛知淑徳大学国語国文』二六、二〇〇三年）、「尾崎紅葉における形容語での「可」の用字——初期作品を中心に——」（『愛知淑徳大学国語国文』二七、二〇〇四年）、『近世後期語・明治時代語論考』（和泉書院、二〇一二年）、「尾崎紅葉における形容語での「可」の用字について」（『愛知淑徳大学国語国文』四三、二〇二〇年）を引き継いだものである。

（注）「おかしい」に「奇怪」の字を当て「奇<sup>お</sup>怪<sup>か</sup>しい」（藤原真莉「華くらべ風まど——清少納言椰子」二〇〇三）とした

例は見られる。(笹原宏之編『当て字・当て読み漢字表現辞典』三省堂、二〇一〇参照)。

(文学部・文化創造研究科教授)